

今月の谷口雅春先生のお言葉

わが子の運命を善くする言葉の力

「自分はまだまだこれからだ」

自分で自分を振返ふりかえって見て、まだまだ本当に自分の行おこないや、仕事や、勉強に、満点がつけられない人はたくさんあります。そんな時にあなたはどうかお考えになりますか。「自分は駄目だめだ」とお考えになりますか。それとも「自分はまだまだ駄目だめだ」とお考えになりますか。自分を振返ふりかえって見て、満点がつけられない場合に、「自分は駄目だめだ！」とお考えになれば、勇気がくじけて、これから先は進歩しないのです。「自分はまだまだ駄目

だ！」とお考えになる人も、行く先まだまだ道遠みちのとおしというような感じがして、そんなことでは本当に勇気が生れては来ないのです。では、そんな時にどう考えればよいでしょうか。「自分はまだまだこれからだ」と考えるのです。幼い人も、若い人も、年寄も、みんな「自分はまだまだこれからだ」と思うことによって、元気が出て来ます。力が内から湧わいてくるのです。年寄も若返わかってくるのです。では、皆さん、これからどんな時にも「自分はまだまだこれからだ」と思うようにいたしましょうね。

(光明思想社版『人生読本』138～139頁)

自分の中に神の力が

「自分はまだまだこれからだ。」こう思う人には失望はありません。どんなにいま失敗していても勇気がくじけることはありません。どんなに今成功していても、どんなに今偉くても、自分はまだまだこれからののです。「自分はまだまだこれからだ」という言葉には、どれだけ偉くなっても、まだまだ善くなる力を含んでいます。それには無限の力を含んでいるのです。無限の力は神の力ですから、「自分はまだまだこれからだ」と言う人は、自分の中には神様の力があると、自分自身を賞めているのと同じことです。

(光明思想社版『人生読本』140～141頁)

自惚と自尊とは異つ

自分自身で、自分を賞めるような人になれとは、自惚で、できもしないものをできたと思ひ、ちよつとぐらい

できたので、これで神の子のでき栄えだと思ひ上つていばることではないのです。自分を神の子だと思ふことは、言い換えれば「自分はまだまだこれからだ」と思ふことなのです。賞められていばる者は、自分がまだまだこれからいくらでもたくさん能力の出る神の子だということがわからないのです。「自分はまだまだこれからだ」ということと「自分はまだ駄目です」と謙遜することとは表と裏です。「自分はまだ駄目です」ということは、今のようではまだ駄目だから、これからまだまだ力を出すという意味ではありませんが、「自分はまだ駄目です」といえば、「駄目」という悲観的な言葉の力で、心が沈んでしまいやすいのです。同じ意味でも「自分はまだまだこれからだ」と心の中で言うようにすれば、力が湧然と湧き出てまいります。これを言葉の力と申します。皆さん、常に「自分はまだまだこれからだ」と考えて、今日は昨日よりも上手に、明日は今日よりも上手に、仕事でも、勉強でも熱心に精出してやることにいたしましょう。

(光明思想社版『人生読本』141～142頁)

思うとおりになる世界

私達は思うとおりの人間になり、思うとおりの運を招ぶことができるのです。運が悪いという人は、みな自分の思いが悪いのです。だから私達は善い事ばかり思うようにしましょうね。そして自分は立派な「神の子」だと常も思うようにしましょうね。私達みんなの心の中には、「みおや神様」のお力がいつも一杯に充ち満ちていて、自分の思うとおりのものを造ってくださるのです。ですから、あなたがいつも「自分は神の子だ、神の子はなんでも都合よくできる」「神の子は素直だ」「神の子には病気が無い」「神の子はいつもしあわせである」などと善いことばかり思うようにしておれば、神様がそのとおりにしてくださるのです。嬉しいではありませんか。「わたしは神の子だから、神の子らしくなるのだ」とただ思っているだけで、ほんとうに神の子らしくなっていて、あなたのお顔まで明るい立派なお顔に変わり、成績もよくなり、身体も達者になってくるのです。そ

れが、人間は「神の子」「仏の子」である証拠なのです。善き思いをすれば、いくらでも善きことが出て来るのです。仲よくすれば、神様、仏様の姿が私達の心の中に、健康の中に、運がよくなることの中に、顕れられるのです。(中略)

私達は、みんな自分たちの心が変わってくるだけで、こんなふうにご世は変わってくるのです。自分が「神の子」であるということが、はっきりわかった人の言葉は、しっかりときます。また、その人の考えは正しく間違はないのです、そうしてその人の行いは美しくなり、その人の心はいつも勇んでいるのです。顔はいつもにこやかで、その言葉つきは晴れ晴れしてきます。ですから、その人と話す人はみな喜ばされ、その人の言葉を聞く人はみな力強く思い、その人は誰にでも頼られる人になるのです。

(光明思想社版『人生読本』142～144頁)

